九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『日本の石炭産業遺産』を書き上げて

徳永，博文
志免町教育委員会

https://doi.org/10.15017/26292

出版情報：エネルギー史研究 : 石炭を中心として. 28, pp.321-327, 2013-03-22. 九州大学附属図書館付設記録資料館産業経済資料部門
バージョン：
権利関係：

『日本の石炭産業遺産』を書き上げて

徳永博文

はじめに

二〇一二年六月十八日、私は弦書房から『日本の石炭産業遺産』を出版した。共著としては、二〇〇八年一月二十五日に出版した『福岡の近代化遺産』（弦書房）があるが、単著としては初めてのことである。

単行本（ソフトカバー）で、総ページ数は二八八ページの本書では、はじめに明治期から始まった石炭産業の現状に触れ、今も石炭が社会とは切っても切り離せない現状があることを提示した。そして、その産業の跡が遺産として捉えられてきていることを語った。

しかし、石炭を見たこともない若い人が多い中、その石炭が日本のどこで産出されていたか検討もつかないだろうと感じたところから、読者にわかりやすくするために、全国の主要炭田地図を載せることとした。そして、それらの地域でどれだけの石炭が産出されたかを折れ線グラフで表し、炭鉱遺産分布地図で現在の遺産のある位置を示してみた。読者層は、近代史、エネルギー史、産業考古学を学んでいる人及びそれらに興味のある一般（高校生以上を対象）としたが、一般書としても読めるのではないかと思う。

本書の中の記録は、全国三三〇ケ所にのぼり、そのうち取り上げた九十ケ所の石炭産業遺産は北海道、福島県、茨城県、東京都、山口県、福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、沖縄県に所在し、日本全国に石炭産業遺産が分布していることがわかる。保存あるいは放置された石炭産業関連施設のほぼすべてを調査しているが、全てではない。しかし、本書により各地に残存している遺産から、石炭産業の歩んできた軌跡を知ることができると思っている。

二〇一二年七月八日の西日本新聞朝刊や、八月四日の図書新聞三〇七三号、八月五日の熊本日日新聞朝刊、八月二十七日の毎日新聞朝刊に書評が掲載された。

調査のきっかけ

ここでいう「石炭産業遺産」の「産業遺産」とは、人々が生活するうえで生み出された製品や、その製品をつくるための道具・施設の中から、特に重要で伝承すべき遺物や遺跡と定義できる。それには大きなインフラストラクチャ（社会基盤）や、工場などの施設といったものから、機械、道具などの小さなものも含まれ、その関係するあらゆるものが産業遺産ということができる。

「産業遺産（Industrial Heritage）」は産業革命以降の鉱工業の遺産を指すことが多いが、イギリスで産業考古学が成立した後、研究対象の明確化のために定義付けられた語である。ちなみに、国際産業遺産保存委員会（TICCIH）は、二〇〇三年に採択したニジニータギル憲章において「歴史的・技術的・社会的・建築学的、あるいは科学的価値のある産業文化の遺物からなる」と定義している。

本書では、そのなかで「石炭産業」に特化したものを「石炭産業遺産」と定義した。つまり、石炭を採掘し、燃料や工業用原料として需要に供給する施設などを中心に、その他に関連するものは、できうるかぎり取り上げたつもりでいる。時代としては幕末から昭和のものをとりあげている。また、「石炭産業遺産」は、「炭鉱遺産」ともいわれるが、文化庁のいう「近代化遺産」の一部として紹介されることもある。また、経済産業省では、我が国の近代化に大きく貢献した産業遺産を「近代化産業遺産」として認定しているので、そのカテゴリーの中にも入っている。

なぜこの調査をしたかのきっかけだが、私の勤務する志免町には「旧志免鉱業所竪坑櫓」という石炭産業遺産が所在する。この竪坑櫓は、構造が鉄筋コンクリート造で、一九四三（昭和一八）年五月十日に竣工している高さ四七・六五m、長辺十五・三m、短辺一二・三mの巨大な建造物である。当時の第四海軍燃料廠が石炭採掘のために建設し、炭層に垂直に掘られた竪坑が地下四三〇mまで延びている。その竪坑を使って地下へ昇降する施設となっているが、櫓と巻上機が一体となっているワインディング・タワー（塔櫓捲式）と呼ばれる特徴的な形をしている。最盛期にはこの竪坑から年間五十万トンもの石炭採掘されたが、閉山後は廃墟としか取り扱われていなかった。

私は、産業考古学会からこの建造物は重要文化財にもなりうる貴重な文化財だと聞かされ、その重要性というのが当時はわからなかったので、個人的に調査をしようと考えたのである。それが端緒といっていい。その現地調査は一九九八年から十三年かけて行い、全国の石炭産業遺産の保存・活用の事例を調査するにつれて、いつとなく資料が次第に集まっていたのである。それがデータベースとなって、いつのまにか本となるまでの一覧となっていた。

そもそも、私にはこうした産業遺産の本を出版する意図はなかったが、勧められてこの遺産一覧を元に本を書く作業に入った。作業は、まずは石炭産業遺産を九十ケ所にまとめた。その基準は、単位としてその石炭産業遺産が時代背景を物語るものとし、その地域・地区で保存・活用されているものや、特に記録しておきたいものを選ぶこととした。書ききれないその他のものは、末尾の全国の石炭産業遺産一覧表として取り扱うこととしたが、その数は三三〇ケ所にのぼった。そこには、所在地・竣工年・指定などの基礎情報を示しているほか、住所や連絡先、見学の可否も記載したことで、資料的価値を備えることができたのではないか

と思う。また、石炭関係年表、炭鉱言葉、人物中を備えて、調査した際の参考文献と、参考にしたホームページ一覧を掲載した。こうしたことで、歴史的資料としても使えるのではないだろうかと思ったし、すでに刊行されている資料と照らし合わせながら、遺跡のその後の経過を知ることができるのではないかと思っている。

さらに、資料館や博物館の五十件の一覧も掲載した。石炭関係の資料を多く所有する夕張石炭博物館、いわき市石炭・化石館、田川市石炭・歴史博物館、大牟田市石炭産業科学館のほかに、石炭産業の史料を多く所蔵する九州大学附属図書館記録資料館産業経済資料部門の紹介もおこなった。記録資料館産業経済資料部門では、炭鉱札という紙幣で賃金を支払った歴史を知ることができる。これらの資料館の活動によって、炭鉱というものが後世に語り継がれていくであろう。

写真については、特に記載がない限り私が撮影したものを使用した。私の石炭産業遺産の認識と表現が写真に現れているのではないかと感じているし、分布地図もつけたので、遺産見学の手引や見学時のハンドブックとしても使えるようになったと思っている。

「旧志免鉱業所竪坑櫓」についての、歴史的意義や保全方法を検討するためはじめた調査は、国内にとどまらず、行われることとなった。九九年には欧州各地に残る石炭産業遺産も見るに至った。イギリス・ドイツ・フランス・ベルギーの炭鉱があった地域では石炭博物館が整備され、その中でベルギー・リエージュ州では志免町と同型（ハンマーコプフ式＝金槌型の上部の櫓）の竪坑櫓が現存し、炭鉱観光博物館となっていたことを確認できた。どうして、このような保存が成功したのか、くわしいことはわからないが、それらの地域では受け継がれた石炭産業の文化を、住民の参加によって総体として伝えられる場ができていることを知った。海外ではこうしたエコ・ミュージアム的な動きがおこなわれ、産業遺産が博物館などで保存・活用されているのを知り、いずれ日本でも石炭産業遺産を文化財として残す環境になると直感したとともに、そういった手法があることを学んだ。

二〇〇一年には中国・撫順市へ「同型の竪坑櫓が現存する」との情報を聞き、調査するため渡航した。そこでは、戦後初めて撫順に南満州鉄道（株）が建設した竪坑櫓が存在することを確認できた。これらの調査で、現在認識されている終戦前に建設された志免鉱業所と同様の構造をもつ櫓は、世界で中国撫順市の龍鳳炭鉱、ベルギー・リエージュ州のトランブルー炭鉱をあわせた三ケ所だけに現存しているという結果にたどりついた。（ただし、ドイツ・ドルトムントのミニスターシュタイン炭鉱と、ザールブリュッケンのカンプハウゼン炭鉱に同様のものが残ると思われる）

こうした情報の蓄積から、竪坑櫓はその存在が少しずつ知れ渡り、そして二〇〇七年七月三十一日に国の登録有形文化財となった。翌年には『志免鉱業所竪坑櫓』として志免町文化財調査報告書第一七集が、志免町教育委員会から刊行される。これにより竪坑櫓の文化財的価値が認識され、二〇〇九年十二月八日に近代建設技術史上価値が高いものとして、国の重要文化財（建造物）となったことは、当初の目的を達成した喜ばしい出来事だった。

今では、志免町には竪坑櫓を中心に炭鉱の遺産が残ることとなり、福岡県内でも製鉄と石炭の産業で近代日本を牽引してきた遺産を、九州・山口の産業遺産と連携させユネスコ世界遺産への登録を行おうという動

きもある（「九州・山口の近代化産業遺産群」として、二〇〇九年一月五日に暫定リストに追加掲載されている）。

今でこそ、近代化遺産といって保存される文化財は多くなってきているが、二〇〇〇年当時はそのような時代ではなかった。これらの遺産・遺跡は、調査をしていくと、地域を見直すためのアイデンティティーたるものであることが少しずつわかってきたので、私はそういった意味からも、残存している遺産は、歴史的景観などを含めて、郷土の歴史を伝える役割があると考えている。

しかし、これらの遺産は、ややもするとマニアの人たちに「廃墟」としての紹介をされがちである。最近では、近現代の遺産・遺跡が、地域を理解する上で大変重要な存在と考えられるようになってきているので、本書ではこうしたことを踏まえて、学術的な観点から遺産を紹介することに努めている。また、豊富な写真で、「廃墟」感を跳ね返すようなイメージを抱かせ、文化財としてのさまざまな価値を高められればと意図しながら作成した。

炭鉱そのものが文化

本書の内容は、炭鉱跡などの工場跡、システムそのものにとどまらず、石炭輸送関連の遺跡、石炭で財をなした人物とその邸宅、そこで働いていた人々が暮らしていた痕跡、石碑や信仰の対象など幅広くとらえている。それは、炭鉱がもつ社会性を見つめたかったためだ。炭鉱にはいろいろな文化が栄えた。「炭鉱そのものが文化」ということがいえると思う。炭鉱住宅や共同浴場、商店街、劇場・映画館の施設の建設や、鉱業所でのスポーツ・文化のサークル活動など、生活の中での文化が花開く。そして、文学や絵画も芽生えた。各地の唄として「北海盆歌」、「常盤炭坑節」、「正調炭坑節」という民謡を紹介した。料理や食べ物では「ホルモン」、「もつ鍋」という馴染みのものについて触れているし「千鳥饅頭」、「ひよこ」というお菓子についても炭鉱文化から生まれたものとして、これらをトピックスとして紹介している。それらからは、連綿と引き継がれた石炭を取り巻く社会で、特徴ある文化が醸成されてきたことが認識できると思う。

本の構成は、炭鉱の所在地を北海道、本州、九州といった地域別にして、北海道では歌志内炭鉱、空知炭鉱、美唄炭鉱、夕張炭鉱、釧路炭鉱など二八ケ所、本州では古河好間炭鉱、常磐炭鉱、東京炭鉱、山陽無煙鉱業所、沖ノ山炭鉱など十六ケ所、九州・沖縄では田川鉱業所、宝珠山炭鉱、志免鉱業所、三池炭鉱、杵島炭鉱、池島炭鉱、端島炭鉱、魚貫炭鉱、西表炭鉱など四六ケ所を紹介した。これにより石炭産業は全国にあり、そのなかで産業としての裾野が広がっていることを感じていただくことができるであろう。

また、炭鉱開発者や経営者にも注目し、人物註も付けた、安川敬一郎、松本健次郎、頭山満などを挙げている。北海道と九州の石炭開発において資本、人材、技術が相互に交流していたことが窺える。また、常盤炭田の大江卓、竹内綱、筑豊炭田の平岡浩太郎、麻生太吉、伊藤伝右衛門などにも注目し、産業としてだけにとどまらず、その資金は政治や世論に注ぎ込まれたことにふれている。日本最古の大手資本といわれた高島炭鉱のトーマス・グラバー、後藤象二郎と岩崎弥太郎率いる三菱財閥が石炭を通して、日本の政財界に大きな影響を及ぼしていることは、その

一例と言えるのではないだろうか。

しかし、炭鉱と一口に言っても華やかなりしことばかりではない。一方では、事故や労使紛争、閉山問題など暗いイメージがある。炭鉱開発は労働集約型産業でもあった。炭鉱では、労働力の流出を防ぐ手法として、納屋制度とも呼ばれる独特の集団を組んでいた。また、友子制度なども発達した。第二次世界大戦期では、史実として囚人、徴用、戦争捕虜を酷使した陰の歴史もあるので、そのことも記している。

歴史としての石炭産業遺産は、炭鉱事故や、労使闘争、鉱害復旧事業などといった出来事を包括していることも考えておかなければいけない。時代の隆盛の光と衰退の影の部分がつきまとうが、そのことを踏まえて、時代の流れや社会の変遷を、石炭産業遺産を通じて解明していくことこそ、次代の繁栄の基礎となるのではないだろうか。

また、資料だけで見ていっても、現代人には稼動している炭鉱というものは想像できないと思ったので、その歴史を知る手立てとして、炭鉱社会を舞台にした内外の映画作品の解説を付け加えた。国内映画の『青春の門』『幸福の黄色いハンカチ』などの叙情的作品や、海外の『わが谷は緑なりき』、『ブラス』などの炭鉱での絆を捉えた作品を紹介している。ほとんど炭鉱に触れることができない現代人には、動画としての記録は炭鉱をイメージし、理解するには最良の提示になったと思われる。

調査を通して

調査中にはいろいろな出来事があったが、調査地が亜寒帯湿潤気候から熱帯雨林気候まであるので、まずは、調査の時期から選定して行った。そしてどの季節、どんな場所でも長袖、長ズボンで行動した。その理由は、ダニやシラミ、危険な生物との遭遇の可能性もあって、安全な場所ではないからである。

北海道エリアは、ゴールデンウィークを利用した。北海道の遺構探訪には、四月初旬までは雪が解けておらず遺構が埋もれて、全く見ることができないし、夏に行くと草木が繁殖しすぎて中には入れないからだった。僻地が多く、雪解けの時期で、キタキツネや蝦夷鹿と顔を遇わすことができたが、熊と遭遇しなかったことは幸いであった。また、食べ物は大産地として非常においしかったことは思い出となった。

本州エリアで一番心に残ったのは常磐の言葉だ。福島弁は音が濁ることが多く、「ベェ言葉」で話されると、小さなことにくよくよしないといった気がしてくる。ほんとに調査中にも親切に教えていただいたりすると、「おだがいさま」といったやさしい当地の人柄も感じ、地域が柔らかい印象を受けた。また、東京については、炭鉱施設は残ってはいないが、唯一、バス停の名前に「東京炭鉱」と記されている、その写真を撮るだけに足を運んだりもしたことは思い出に残る。

九州・山口エリアは、夏に行くと草木が繁殖しすぎて遺構の中には入れないので、三月頃に行くことが多かった。そのなかでも筑豊の遺構の密集度は日本一で、石炭産業の関連遺産を一環として見るには一番の地域である。また、最南端にある石炭産業遺産の島、西表島には十月に行ったが、台風の接近個数も減り、暑さも和らぐ時期でもあった。亜熱帯の青い海と白い雲を眺め、マングローブの林に潮風を感じながら散策すると、南国を肌で感じる。サキシマスオウノキやヤエヤマセマルハコガメ、大きな蟹・シジミといった動植物のすばらしさを堪能できた。た

だし毒性の強いサキシマハブには注意が必要だったことを付け加えておく。

以上のように調査で感じたことは、石炭産業遺産のある地は、過去との対話ができるという場所だけでなく、現在住んでいる人々の日々の生活にふれられる場所であったということである。遺産が、自然に還っていっている場所が多かったが、そこで出会ったいろいろな人との「気付き」の場となり、それが私の財産となった。自然のいたずらに感動し、人との会話でその地域自体に関心をひきつけられた、これらの場所の多くには遺産を伝承する「語り部」の存在もあった。昔から語り伝えられる昔話、民話などを現代に語り継いでいる人を「語り部」というが、ここでの「語り部」は石炭産業の思い出の「もの」を前にして、それを説明し、伝承している人で、石炭産業について具体的な物を見て、触って、話しをして、その価値や背景を聞く人々に実感させている。しかし、彼らの多くは高齢者で、生の声を聞けるのは今のうちだけである。だからこそ、この「語り部」たちのように石炭産業というものを、語り継ぐ方策を、今後、とっていかなければならないと感じている。

人がつくり上げた社会の出来事を人が伝えていくことは、健全な社会を形成していくために、私たちがすべき仕事と思う。石炭は、今でも私たちの生活に切り離せないものなので、歴史の中でどのように「石炭」が受け入れられ、発展してきたのか、その産業が近代において日本の発展にどのように貢献したのかを伝えていくことは、遺構の保存や記録でしかない。伝えるということは、それ以上に、石炭産業を支えた炭鉱夫やその家族の有様までも描くことができれば、有意義なものとなる。

これらの遺産を守る総合的な取り組みは、地域住民の精神の拠り所をまもることでもある。ＮＰＯなど若い世代で全国的に連携し、石炭産業遺産の交流を深める事業が少しずつ始まっている。石炭産業を核として歴史的価値、文化的価値、社会的価値が結実した町が形成されてきた場所は、それらの価値を保存していくことが必要と思うし、人類共通の文化遺産として、守る活動の充実がなされることを心から願う。

おわりに

日本はアジアで最初に産業革命を達成した国であり、実際に鉄と石炭はその時代の国家の屋台骨であった。現存する遺産はその証でもある。本書で紹介しているこうした炭鉱の歴史を多角的に見ることによって、現在も石炭の大消費地である日本において、石炭産業遺産が改めて見直されることになればと思う。加えて、炭鉱の歴史や事象に現代社会が見習う点は多いと感じられる方は多いのではないかと思う。

現代のコミュニティー社会から考えると、余所者が集まってできた、物資も人心も豊かな人工コミュニティーが形成されていた点は考察すべき点ではないだろうか。また、純然たるエネルギーとして見るならば、二〇一一年三月十一日の東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）では、炉心溶融と建屋爆発事故が発生し、原子炉は廃炉の途上にあるが、私は非常に大きな問題だと感じた。原子力発電の代替としてメガソーラーや風力のほかに、火力発電が増えているようだが、この火力発電用の石炭は中国やオーストラリアなどから輸入しているため、日本の石炭産業も復活するのではないかとさえ感じている。またエネルギーは社会と切っても切り離せないものだから、日本の石炭産業が遺産となったように、

原子力発電所の地が遺産になる日が来るのではないかとも思っている。そういった意味でも、私は今後の科学の進展について見守っていきたい。

現代社会は、いつのまにか競争と排除を求めてきた。しかし、私自身、これからは共助と包摂の社会が必要と感じているところである。石炭産業の社会は、この日本の全体で築いてきた社会・歴史と相似している。打ち捨てられた石炭産業遺産の中には、未来へつながる何かが存在しているのではないだろうか。

地域の人々に「炭鉱があった」という記憶を蘇らせるきっかけは、やはり坑口施設など、現存する様々な遺産群であるが、全国の炭鉱遺産から感じ取れるものは、石炭がもたらした豊かさとともに、近代日本の繁栄の光と影の記憶であると思う。

このたび刊行となった書物が、石炭産業遺産の保存と記録の継承を喚起し、文化財保護への理解と認識を深める一助となれば、近現代史研究の研究をしているものの一人としてまことに幸甚である。